

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治



“テロリストに乗っ取られたJR東日本の真実”

「マングローブ」ダイジェスト版 第13回

あの「週刊現代」連載記事が【マングローブ】という本になった。本紙は筆者（西岡研介氏）の了解を得て、『謎に包まれた非合法集団とJR東日本の抜き差しならぬ関係』をダイジェスト版として紹介することとした。

仙台で開かれた「極秘会議」

また現在のJR東日本経営陣の最高幹部である大塚陸毅会長(64歳)や、清野智社長(59歳)も、JR東日本発足当初は、松崎によるJR東日本の経営権への介入に強い危機感を覚えていた。野宮氏の元部下が証言する。「90年のことです。仙台のメトロポリタンホテルに当時、人事部長だった大塚さんと、総務課長だった清野さん、野宮さんら人事・労政関係の幹部が極秘に集まり、今後のJR東労組対策について話し合ったことがありました。

その席で大塚さんは『せめて仙台(支社)だけでも、われわれが望む(松崎に支配されない)労使関係を維持してほしい』と話していました。そして(組合から革マル派を排除した)JR東海やJR西日本の労政に触れ、『あのような単純な手法は少なくとも、JR東日本にとっては愚の骨頂だ。あの連中(革マル派)にはアメ玉を食わせ、時間を十分にかけ、次第に牙がなくなるように対応し、ついには牙がなくなってしまう-というような遠大な計画が、JR東日本の革マル派戦略だ』と強調していました。

清野さんは『社員教育をしっかりとやれば(革マル派による支配は)、必ず防げる』と語っていました。極秘会議に出席した若手幹部からは『いつこの異常な労使関係から抜け出せるんですか』との悲痛な声も出ていましたが、清野さんは『なんとか軟着陸をめざすしかない。時機を待つことだ』と答えるのが精一杯でした。

大塚さんも清野さんも、少なくとも90年時点までは、松崎とベッタリと癒着した住田松田体制の見直しを図らなければ、と真剣に考えていたのです。ところが、前述の松田氏の『癒着発言』以降、大塚、清野両氏も労政改革に及び腰になりはじめたという。野宮氏の元部下がさらに続ける。

「清野さんに至っては『異常な労使関係の軟着陸をめざすことは大切だが、正直、その時機がいつになるのかわからない。あるいはそういう時機は来ないかもしれない』とトーンダウン。果ては、再び若手幹部から『本当にこの労使関係を変えるつもりはあるのですか』と詰め寄られた清野さんは苦渋の表情を浮かべ、こう答えたのです。『今のJR東日本には、旧国鉄時代の本社採用(いわゆるキャリア組)のような使命感はないんだ。もう松崎体制を前提にしてすべてを考えるしか、われわれが生き残れる道はないんだよ。これは本社幹部の共通認識だ。たしかに君の考えはそのとおりだし、まったく同じ思いだが、もう、どうすることもできないんだ……』これを聞いたわれわれは皆、目の前が真っ暗になりました」

【マングローブ(講談社)P.160~P.162】